

トピックス



大阪市北区天満橋 1-8-75 TEL 050-3160-6763

<http://www.rinya.maff.go.jp/kinki/>

「林業事業体等の生産性向上支援の取組み」

～平成29年度国有林間伐・再造林推進コンクール推薦事例から～

林野庁の平成29年度国有林間伐・再造林推進コンクール(*1)において、当局が推薦した有限会社杉下木材(兵庫県宍粟市)が優秀賞を受賞しました。受賞理由はロングリーチグラブ(*2)の活用による木寄せ集材工程の生産性を高め、主伐作業における一人当たりの生産性を従来型の8.1m³/人日から14.0m³/人日へ73%向上し、かつ、生産コストを29%削減したことと、また、植付けに必要な地寄せを木寄せ集材と同時に実施したことで、再造林の作業効率を高め、トータルコストを削減したことが高く評価されました。(下図:生産性向上と生産コスト削減図)

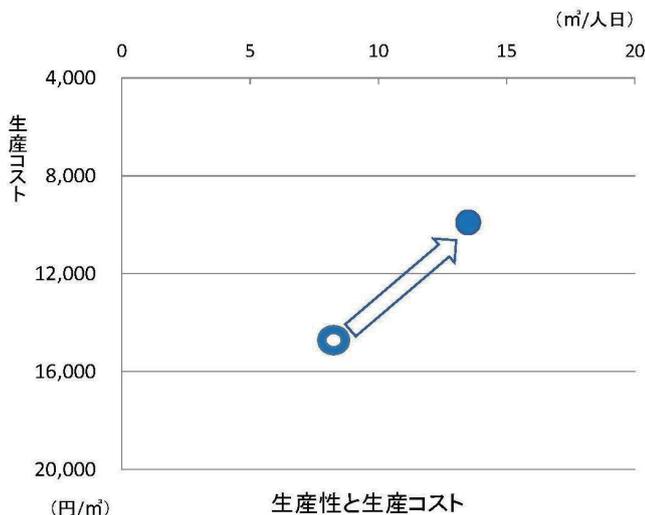


ロングリーチグラブによる木寄せ集材作業

また、惜しくも受賞は逃しましたが、同じく当局が推薦したGEEP Forest株式会社(岐阜市)は、高性能林業機械のオールレンタルによる固定費の削減と最適作業システムの構築とともに、主伐作業の生産性を7.9m³/人へと向上させたこの取組みの普及性が、更には、しそ森林組合(兵庫県宍粟市)は、搬出間伐作業の生産性を8.1m³/人へと向上させ作業員全員で工程管理をしたことが共に評価されました。

林業事業体等の生産性向上は、地域林業を支える担い手の収入増加や国産材の供給の増大につながり、林業の成長産業化にとって避けて通ることのできない重要な課題です。製造業では生産性向上のため、「工場の限られた空間の中でいかに効率的に作業を行うか」を追求してきました。工場と林業の現場では作業環境や工程が異なりますが、生産性向上のためのこのような考え方は林業にも適用していく必要があります。

近畿中国森林管理局では、右の数値目標を掲げ、平成29年度は試行的に、日報・月報による生産工程の管理をし生産性向上の支援を行ってきましたが、平成30年度からは全14署等でこれらの取組みを本格実施する予定です。



近畿中国森林管理局の目標

(H27年度)

(H37年度)

間伐 4.2m³/人日 → 8.2m³/人日

主伐 5.4m³/人日 → 11.1m³/人日

*1 間伐・再造林推進コンクール

国有林野事業において、担い手の育成等の取組みとともに、生産性の向上等を達成した優れた取組みを林野庁長官が表彰

*2 ロングリーチグラブ

伸縮式のアームで木材を掴むことのできる高性能林業機械

ニュース

切った輪切りでペン立て作り
～高尾小4 森林教室～

【森林技術・支援センター】

1月25日(木曜日)、森林技術・支援センター会議室において、新見市立高尾小学校4年生を対象に森林教室を実施しました。

最初に、5年生で学習する「森林とわたしたちの暮らし」の予習として「林業について学ぶ」と題して二宮企画係長より植付けから保育・伐採までの作業を紹介し、林業のサイクルによって日本の森林が守られていることについて説明をし理解を深めてもらいました。また、動画で高性能林業機械による木材の伐採や搬出作業の迫力ある映像を見てもらい林業の世界を感じてもらいました。

続いて木工クラフトづくりでは、「ノコギリで木を切ることの体験を通じてペン立てを作りたい」との児童の事前アンケートから、大きさや長さの違う木の輪切りに挑戦しました。児童から「見てみると簡単そうだったが、実際やってみるとしんどい。」といった声が聞かれましたが、途中で諦めることなく、汗をかきながら最後まで懸命にノコギリをひいていました。

節分を迎えることもあって、鬼の顔のペン立てを制作する生徒もあり、素敵なオリジナルペン立てが完成しました。

最後に保護者の方にも森林技術・支援センターについて理解を深めて頂くためPRパンフレットを児童に配布し、当センターのPRを行いました。



管内地方自治体出向者会議の開催

【企画調整課】

林野庁においては、人事交流の目的で多くの都道府県庁や市町村役場へ職員を派遣していますが、そのような出向中の職員と林野庁・森林管理局とがお互いの取り組み状況について情報共有する観点から、1月18日(木)、局大会議室にて局管内自治体出向者会議を開催しました。管内の出向者13名のうち8名(府県4、市町村4)、林野庁からは小坂計画課長、藤本木材産業課専門官に出席いただきました。

まず出向者から、それぞれの自治体の現状や取り組んでいる施策・課題と国有林に期待することについて報告



いただきました。少子高齢化、人口減少という問題を抱えながら、地域の資源である森林を活用して活性化を図るための取組を進めており、各自治体において様々な工夫がうかがえました。また、国有林に対しては、低コスト造林やシカ被害対策など、技術的な支援が各地域から期待されており、今後の情報提供や現地検討会への自治体職員の参加に対する要望がありました。

続いて林野庁から、森林環境税や新たな森林管理システム、川下対策について情報提供を行いました。昨年末の税制改正大綱において森林環境税の導入が決まった直後のタイミングでの開催となり、特に森林環境税の導入において、府県や市町村が中心的な役割を果たすことから、出席者の関心も非常に高く、活発な意見交換が行われました。

局としてこのような形で情報交換する会議は久しぶりの開催となりましたが、森林・林業は地域と密着したものであり、今後とも出向者の方も含めて、各自治体との連携を図って参ります。



出向者のみなさん

森林環境教育（森林ESD）活動報告・意見交換会の開催

【箕面森林ふれあい推進センター】

今回で3回目となる「森林環境教育（森林ESD）活動報告・意見交換会」を、1月27日（土）近畿中国森林管理局大会議室において開催しました。

今回は、幼児期の事例を含めて募集を行い、ESD（Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育）の視点で見直した実践の成果や活動団体の役割、また保幼小連携などを考え、成果の共有、相互交流、連携や活動の活性化を通じた森林環境教育（森林ESD）の普及を目的に実施しました。

当日は、教育機関・自治体・活動団体など75団体125名の参加があり、3つの講演と8事例12団体から教育機関と活動団体が連携して取り組む森林環境教育の事例報告、パネルディスカッションを行いました。

講演では、京都教育大学の山下宏文教授より、森林ESDの視点についてや過去2回の取組の成果の報告がありました。また、NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟の内田幸一理事長からは、内田さんが運営する森のようちえんの活動の紹介、森のようちえんの運営の考え方や、子ども達に自然環境の中でどう意識化させていくかを考えていることなどが話されました。国土緑化推進機構の木俣知大課長からは、森林ESDの視点から、学習指導要領改訂を踏まえて教育に求められるものや、そのための支援・協働の体制の動きなどが報告されました。

また、事例報告は、幼児教育関係5事例、小学校関係3事例について行われ、連携によって活動団体自身も活性化していることや、地域での繋がりが深まり、さらに取組が広がっていること、森の中で子ども達が生き生きと体験をしていること、そうした中から子ども同士で考え共同して取り組む姿が生まれていることなど、それぞれ多様な背景を持った事例として体験・実践の報告



パネルのみなさん

がありました。

その後、元地球緑化センターの金井久美子さんの進行で、講演者と発表者によるパネルディスカッションを行い、森での活動で感じることや連携による変化・保幼小の接続など、それぞれの活動の中で感じていることが語られました。

講演者からは、「森林・自然が持っている教育力をあらためて感じた。」「発表



パネルディスカッションの様子

事例から、質の高い体験が行われており、活動がESDとして成り立っているかを考えてもらえた。幼児期でしかできないことがあり、森林体験の意義ということを考えてもらいたい。」などの意見が出されました。

最後に、主催・共催団体から、公益社団法人国土緑化推進機構の 富永茂 政策企画部長は「森の力、子どもの力を信じることの大切さを学んだ。関係者がどうやって連携していくかが大事で、信頼関係が生まれることでいいものができていく。国土緑推としても支援活動に取り組んでいく。」と挨拶があり、エコネット近畿の 新田章伸 副理事長からは、「いろいろなところで成功事例がある。出会うや学び合うことが大事であり、こうした場を活かしてもらいたい」と挨拶がありました。

最後に当局の 高井森林整備部長から、「ESDは、地球市民の一員として考えることのできる能力を育てること。地球全体の未来を考える思考の一つに、森林体験が活かされていければと考える。この会では、いろいろな立場の方々が意見交換できたことはよかった。更に交流を深めてもらい、参加した意義を高めてもらいたい。」との旨を述べ閉会しました。

参加者からは、「大変勉強になった」「地域でも活動を進



意見交換会

めたい」「連携や接続を考えたことはなかったが、関わり方を考えたいと思った」「環境教育や体験学習へのアプローチの仕方についての選択の幅が広がった」「いろいろな事例から自分の中で具体的なイメージが膨らんだ」など、学びや意欲に繋がる感想が出ていました。

シリーズ 『国有林 最前線！』

福井森林管理署 ～気比の松原 白砂青松の再生に向けて～

福井森林管理署は、福井県北部の海岸部に位置するあわら市に所在する北潟国有林や県中部の敦賀市に所在する松原・天筒山国有林、石川県、岐阜県、滋賀県、京都府との脊梁地帯に広がる県内の各国有林 (36,402ha) を管轄しています。

管内国有林の特徴として、昭和 27 年から 40 年の間に民有林を買い入れた国有林が多いこと、日本三大松原で有名な「気比の松原」、日本百名山の一つで登山者に人気のある「荒島岳」があること、またスキー場などのレクリエーションエリアなどが挙げられます。このほか、石川県及び岐阜県境には、国土保全、水源涵養など公益的機能の発揮が期待される森林が多いこと、更には白山山系及び越美山地に緑の回廊が設定されているなどの特徴があります。

中でも、松原国有林では、松くい虫等により、松林が衰退しつつあることから、平成 24 年に「気比の松原 100 年構想」を策定し、当署では松くい虫防除等を実施するほか、気比の松原保全対策推進連絡協議会（ボランティア団体）や地元小・中学生等が実施する松葉かきや外来植物のメリケンカルカヤ駆除等の環境整備を支援し、白砂青松の松原に再生する取り組みを進めています。



気比の松原（松原国有林）



松葉かきの様子

岡山森林管理署 勝山・川上森林事務所 首席森林官 森山哲弥

「20年前なら1m3当たり4万円から5万円だったが、このところ何年もスギ1万円、ヒノキ1万5千円。皆さん頑張ってるじゃないか。森山さん。甘いよ。その間にこのあたりの工場は半分が店を閉めた。親方3代続かんと云うけれど、どの工場も2代目がいないよ」。昨年の暮れ、素材生産業を営む市内の事業所に立ち寄ったときに丁度、隣の製材工場の社長がみえていてその時の会話です。

傍目からは華やいで見える木材の町“真庭”ですが、木材価格の低迷の中で歩んできた町工場の集合体なのです。平成 28 年の春、こちらに赴任してきて思ったことは“岡山には山がある”ということ。多くの住民が林業、木材産業に就くこの場所で山役人として仕事ができることを誇りに思います。「国有林の仕事には山で働く者の暮らしがかかっている」。そんな話を以前聞いたことがあります。ここでなら国有林が事業をしていくことの意味が見えると思うのです。

ところで勝山・川上森林事務所は岡山県北部の中央部あたり、真庭市と真庭郡新庄村が守備範囲です。ここでの国有林 21 団地 6,600ha と官行造林地 490ha の人工林造成が主な業務です。

管内には名峰“大山”に並び立つ蒜山高原があります。鳥取県境の稜線沿いに東から下蒜山、中蒜山、上蒜山、三つの峰が蒜山三座です。このうち上蒜山が国有林で、国有林の中を蒜山大山スカイラインが岡山県から鳥取県へ通じており、新緑の季節から紅葉の時期まで、県内外から多くの観光客が訪れ賑わっています。

最後になりますが作業現場は今雪の下です。雪が融けたら、また頑張るのだ。



蒜山三座

お知らせ 里山広葉樹のバリューチェーンはできるのか？里山広葉樹活用シンポジウム

広葉樹に関する川上～川下の報告を通じて近畿中国地方における里山広葉樹資源のバリューチェーンの構築の可能性について探ります。

入場無料 事前申し込み必要です 定員 100 名

日時：平成 30 年 3 月 23 日（金）13:30～17:00

詳しくは近畿中国森林管理局のホームページをご覧ください

会場：近畿中国森林管理局 4 階大会議室